



學界の恨事

今年の八月三十一日には北米大陸の東部で稀なる好條件のもとに皆既日食が見える筈であつて、米國やカナダの天文家たちは幾年も前から此の日食の觀測計畫を進め、既に種々の具體的な準備をやつてゐる方面もあるやに、かねてから聞き及んでゐたが、最近、入手した通信によると、米國の社會に廣く深く喰い入つた不景氣乃至經濟的危機の影響で、各地の大學や研究所も平素の研究經費の不足に非常な悩みを受け、殊に、米國中西部に覇を唱へてゐる某大天文臺でさへ、こんどの八月の日食に觀測隊を派遣する資金が得られず、遂に此の好機會に参加することを斷念するの餘儀なきに至つたといふ。之れを聞いて、吾人はよそ事ならず、遺憾の念を禁ずることが出来ない。此の大天文臺にして然り。他は推して知るべしである。尙ほ今年五月カナダに開かれる筈であつた第五回汎太平洋學術會議が突如として來年に延期されたのも（本誌前號第142頁を見られよ）亦社會經濟上の切迫によると噂せられてゐる。其の他、うち破つて見れば、此の種の例は全世界各地に少なくなからう。實に學界は言ふに及ばず、國家社會世界文化上の大恨事である。およそ、平時と異常時との區別無く、學術の研究ほど、一般文化社會から熱心同情ある支持を受くべき資格を持つものは無い筈である。しかも、之れが上述の状態であるとすると、人間世界には何か大きな錯誤があるのでは無からうか？